



勤務先の敬愛大国際学部で数年前から、「国際学部で農業を」を合言葉に、アグリ&フードビジネスの導入を試みています。国際学部と農業、意外な取り合わせだとよく言われます。

日本では今後、食の安全の確保と、そのために農業が果たすべき役割が大きくなるはず。世界人口の急増と食料価格が叫ばれる中、低い自給率、輸入頼みの食料確保など、その脅威は素人の目にも明らかです。

昨年からは中国が大豆の輸入国に変わったと報道されました。日本の大豆自給率はわずか6%の2009年度、重量ベース。しょうゆもほとんど豆腐も足りなくなると。そんな食生活の変化には耐えられない気がします。

+

国際学部で農業を

愛大にも農家出身の学生は少なくないのですが、皆、サラリーマンを希望しています。でも、若い人たちの就職はとて難しい。後継者問題に悩む農家と、就職難に悩む若者が同じスペース

村川 庸子



敬愛大国際学部教授

2011.8.21

まず食への意識変革

にしているなんてもったいないと思いませんか。彼らが希望を持って農業をやりたい方法は無いのでしょうか。

最近の学生を見ていて不安なのが「食」の問題です。卒業生と話している「日1食しか食べていない」という

話を聞いて仰天しました。その「食」がケチだといいのです。しかも毎日通学でした。極端な例だとしても「食」を楽しむ状況に無い人が多いようです。

アグリ&フードビジネスでは、まず学生の意識を変えたい。この分野の先進的な動きをいろいろ紹介しています。例えば、企業や個人に講演を依頼、地五千葉のしょうゆ会社の世界戦略は大企業の長期的な視野に立った活動でした。不耕栽培の米作では、ネパールの学生と実際に田植えの手伝いに出かけました。無農薬のアイガモ農法

+

ふるさと伝言

その絵本を7カ国語に翻訳する「みその絵本の多言語化プロジェクト」も行いました。最近、中国人と系パールの学生が本國でのみその販売の可能性を探る話をしています。

講演をお願いした中に成田の「でいぼん」という会社があります。社長が愛媛出身で、事務所には「愛媛産には愛がある」というポスターが貼られています。上海など外国に日本の野菜を宅配し成功しておられるとのこと。最近、成田にイチジクを千本植えた、とも話しておられました。将来の温暖化に備えることなどが、「敬愛大にも愛がありますね」と言っていたたきました。

いま海のものとも山のものとも分りませんが、近隣の方々の、協力を得つつ、一緒に学生を育てて行けるようなシステムを構築していきたいと思っています。10月には学生を連れてカリフォルニアの農業を視察に行きます。

+

+